

寸又の旧集落（東側、湯山）を訪ねて

川根本町 森田 雅文

寸又峡温泉（大間地区）の上流にあった旧集落、東側地区と湯山地区を訪ねてみました。

とうきょう川根の会の会報や懇親会の場で旧湯山地区出身の滝波登さんから、度々湯山の思い出話をうかがっており、川根に戻ったら是非一度は足を運んでみたいと考えておりました。そのような中、今年の会報に谷田部さんの「源泉と湯山集落を尋ねて」の記事も拝見し、昨年11月に東側、今年3月に湯山の旧集落跡地を訪ねることができました。

谷田部さんの記事には湯山の地図がありました。東側地区については判らなかつたことから、地元寸又峡温泉「翠紅苑」の望月恒一さんにお話ししたところ、望月さんがまとめられた労作「大寸俣村から寸又峡」をいただきました。

この「大寸俣村から寸又峡」は、A4版189ページに及ぶ立派な本で、大間地区及び寸又川流域の歴史やダム建設、寸又峡温泉開発から観光地への取り組みの足跡など、望月氏が故郷寸又に対する熱い思いをまとめられた貴重な資料であり、地域の資産として未長く多くの人々に読まれるものと思います。

この本に記載された地図をコピーし、大間地区に実家があった妻と二人で旧集落を訪ねることとしました。

（東側集落跡を訪ねて）

平成25年11月11日、朝7時15分に寸又峡温泉駐車場を出発し、静かな温泉街を通り抜け、飛龍橋、夢の吊橋に続く林道のゲート前から沢沿いに下り、7時40分に寸又川に架かる猿並橋を渡りました。そこから朝日岳の登山道となっている急坂を登り、8時頃に寸又左岸林道に上がりひと休みした後、夢の吊橋、飛龍橋や前黒法師岳をはじめとする周囲の山々の紅葉を楽しみながらの林道歩きとなりました。

ところが、寸又川と大間川が合流する地点の上の方まで来たら、突然寸又おろしとも云うべき強風に出迎えられました。これまでの道のりでは朝日岳が強い風を防いでくれたものと実感しました。しかし、林道も寸又川に張出した尾根筋から山の陰に入れば風も収まり、見事な紅葉を間近に見ながら、9時20分頃に下関蔵沢（栗山沢）、9時50分頃に上関蔵沢（朝日橋）、11時15分頃に日向沢と尾根筋の肩を迂回し沢に架かる橋を渡ることを繰り返しながら、旧東側の集落跡地を探し歩きました。

この寸又川左岸林道は急峻な地形を相手に開設したことから、林道の山側、谷側とも崖地の連続で至る所に落石があり、日向沢付近からは落石と崩壊土砂で車は通行できない状況となっていました。

日向沢に架かる橋を渡り、林道を尾根筋のカーブ地点まで歩くと、林道の山側の木々の間に立派な石垣が残されていました。コピーした地図によれば、この石垣はおそらく旧東側集落跡地のうち大村千代次さん、東側分教場の跡地と思われましたが、確かめる術もなく写真を撮り、先を急ぎました。

林道の崩れは激しさを増し、寸又川左岸林道と日向林道の分かれ道付近は、手をつき足場を探しながらの危険な崩壊地越えを強いられました。その後植林された林の中を抜け、お昼頃には「お立ち台」に辿りつきました。ここにはトイレも設けられており、林道が健全であった時には、多くの人たちが訪れたものと思われました。

大間からここまでは晴天に恵まれていましたが、山の天気は変わりやすく、対岸の奥にそびえる不動岳などの山並みが時雨で白く見えなくなってきました。そのうち、時雨の白いカーテンが押し寄せてきたのでお昼のおにぎりを早々に食べ終え、12時30分頃下山することにしました。

お立ち台から、千頭堰堤に向かって登山道を降りてきたら、また木立の中に立派な石垣が目に入ってきました。尾根筋を平場に均して石垣を設け居住地にしていたものと思われます。望月さんの資料によれば望月清一さん、大村八重さんの跡地と思われました。

石垣はお城の石垣のように綺麗に石を積み上げられており、とても素人仕事には見えず、石の運搬から測量、積み上げと相当の技術をもった人たちが作り上げたものと感心しました。おそらく、この大自然の中に最初に住み着いた時には、近くの岩穴などで雨露をしのぎ、平場と水場とを探しながら、木を一本一本切り倒し、丸太材を用いて住まいを作り、その後長い年月、幾世代を経て、大工道具を入手し、丸太を角材、板材に加工しながら住居として整えてきたものと推察しました。

急坂を下り、13時5分頃に荒れ果てた日向林道に着き、尾根筋をさらに5分ほど下ると、緩やかな地形となり、石垣が目に入り、その奥には2階建ての廃屋が残されていました。資料によれば大村友一さん、大村宇佐吉さんの跡地と思われます。廃屋の一部は朽ちているがしっかりと立っており、家の中には往時の生活を偲ばせる品々も散見された。また庭先と思われる斜面にはいくつかの水仙がまだ生き生きとしており、春には綺麗な花を咲かせてくれるものと、また、水仙を植えた人々は遠くに行ってしまうても残された水仙は故郷を守ってくれていると感慨深いものを覚えました。

東側の集落跡地を見ると、大雨などの被害を受けにくく、日当たりのよい尾根筋を拓き居住地とし、住宅の軒先が通路（山道）となっているようで（通路に沿って家を建てたものと思われる）、この険しい山道を頼りながら日々の生活をおくっていたものと思われました。この地では営林署や電源開発の仕事が来

るまでは、基本的には自給自足の生活を強いられ、時々には生活に必要な物資を手に入れるために一日がかりで大間地区まで出かけてきたものと想像されます。

天地方面への分かれ道（狭い山道）を過ぎ、険しい斜面をロープに沿いながら下りおり、無事に13時45分頃に千頭堰堤に到着しました。東側の人たちをはじめ、電源開発や営林署務めの人たちもこの険しい山道を登り降りしてきたと思うと、何かと車に頼りがちな生活に慣れた者にとって、改めて大きな驚きを感じました。

千頭堰堤でひと休みし、14時頃に千頭堰堤を後にして昔の森林鉄道跡を歩き、16時20分頃に大間に戻ってきました。途中、線路がカーブしているために真っ暗になっているトンネル内ではライトを頼りに恐る恐る抜け、陽の明るいうちに大間に辿りつかねばと足を速めようとしても、老体は言う事を聞かず、ひたすら歩き、湯山発電所が見えてきたときには、少し安心しました。それから尾崎坂のゲートを抜け飛龍橋を渡り、薄暗くなってきた林道を急ぎ、無事に大間に到着しました。

（湯山集落跡を訪ねて）

平成26年3月17日、朝8時30分に寸又峡温泉駐車場を出発し、飛龍橋を渡り、大間川に沿って林道を歩き、9時30分頃に前黒法師岳登山口に到着し、ひと休みして、気を引き締めて急な斜面に設けられた登山道を登り始めました。

20分ほど登ると人家の跡（大村彦次郎宅か）と思われる石垣があり、さらに10分ほど上がると「湯山集落跡地」の看板が立っており、平場となっており石垣が残されておりました。望月さんの資料によれば2軒と3軒に分かれていたのか、5軒のまとまりがあったのかわかりませんが、おそらくこの付近だろうと何枚かの写真を撮り、さらに上を目指しました。そこから30分ほど倒木や崩れた道を迂回しながら登ると人家の跡地がありました。さらに20分ほど登ると寸又川と大間川を分ける尾根筋に、小規模な石垣が見えてきました。位置的にこんな尾根の高い所には人家は作られず、また規模的にも小さく、おそらく神明神社跡地と思われました。

神社跡地の背後の尾根道を辿り11時頃に湯山林道に到着し、ここで正面に朝日岳を望みながら、お昼のおにぎりをいただきました。下流から眺めると「川根富士」と云われるような山容をしている朝日岳も横からみると、南アルプス前衛として威厳のある山に見え、下関蔵沢上流部の大崩壊が山の険しさを強調しているように思えました。

前黒法師岳の登山道も登り道はなんとなくわかりましたが、下りは道が分からなくなる恐れがあったので、帰りは距離は長いのですがルートがはっきりしている湯山林道を選び、12時前に出発しました。この湯山林道も寸又左岸林道と同様、何か所もの土砂崩れがあり、その都度安全なルートを探しながら渡

り切りました。1時間ほどで奥湯沢に着き、ひと休みしました。ここからは林道の土砂崩れもなく安全に砂利道を下ってきました。途中湯山沢の大きな滝や大間川に架かっていた沢口山方面への吊り橋の残骸などを見て、13時50分頃無事に前黒法師岳登山口地点まで戻り、飛龍橋を渡り、14時40分には大間駐車場に帰り着きました。

昔の湯山への道は、現在の「夢の吊橋」下流に架けられていた吊橋を渡り尾崎坂まで登り、そこから山道を辿り湯山に向かったようです。湯山には温泉があったことから地元をはじめ下流からも湯治客がこの道を使って訪れたようです。森林鉄道ができるまでは今の天子トンネルがある山を越えての山道であり、滝波登さんをはじめ湯山の子供たちは毎日の通学にずいぶんのご苦労されたものと思われました。(その当時は、湯山に限らず、池ノ谷から上川根小学校へ、桑野山、坂京から東川根小学校へなど、子供たちは遠距離を苦労とも思わず、通学したようです。でも湯山から大間小学校への道は相当に険しかったと推測されます。)

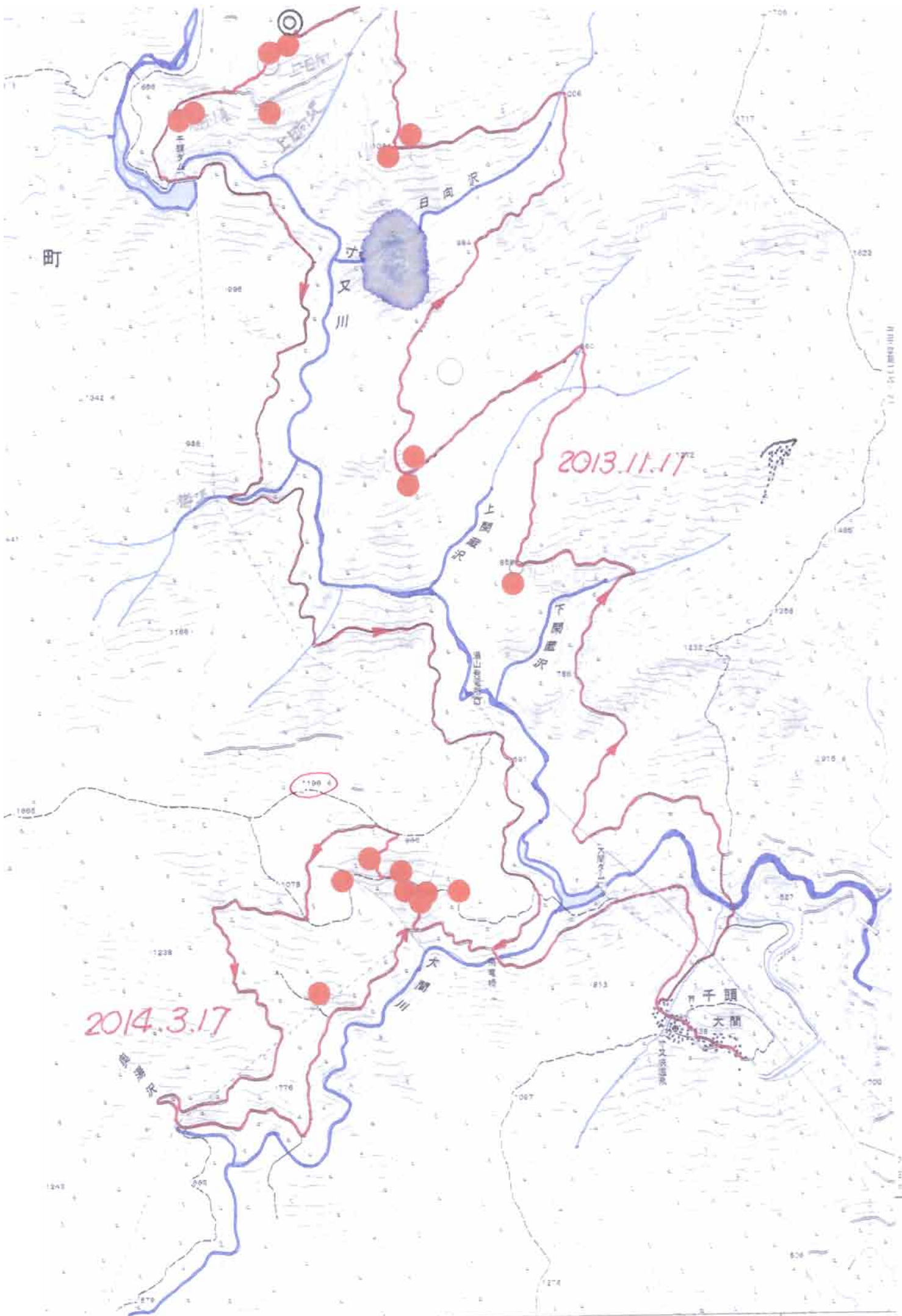
(南アルプスのユネスコエコパーク登録に向けて)

現在、南アルプス山麓の自治体は、南アルプスエリアをユネスコエコパークへの登録を目指して活動を強化しています。資料によれば、ユネスコが人間と自然との共生を目指すために1971年に発足させた「人間と生物圏計画」の中心となる事業で、地域の自然や文化、伝統産業の価値、優れた自然を活かした地域振興や教育に資する活動が評価されることのようにです。

ユネスコエコパークは、自然環境を守らなければならない「核心地域」、環境教育などに活用できる「緩衝地帯」、人々が暮らしを営みさまざまな社会活動ができる「移行地域」の3つの地域で構成されます。

東側、湯山など寸又奥の集落は江戸時代以前からあったと云われており、現在は人が居住していない地区ですが、ユネスコエコパークにおける「緩衝地帯」に位置付け、昔の人々がどのようにして数百年も大自然と共生してきたのかを具体的な事実を当地に訪れる多くの方々提供できるようにしたらどうかと考えます。焼畑農業、狩猟生活、私たち日本人が遠い思い出として資料でしかおめにかかれぬものが、寸又の奥に行けば具体的な自然環境の中で体験できることは、ユネスコエコパーク指定の大きな成果になると思います。

そのためには、まず地区への安全なアクセスルートの整備と宅地や畑の跡地に背を伸ばしてきた立木の伐採を行い、その後地区における昔からの生活を体験できる環境整備に取り組んでいくことが、21世紀以降の東側、湯山地区の姿になると思います。地区出身者が健在である今、古を確かめ、将来の姿を描くことがユネスコエコパーク登録にとっても重要だと考えます。



町

2013.11.17

2014.3.17

日向家

又川

上開原川

下開原川

大湖川

千頭
大開

高瀬川

一文次郎橋



東側住居跡(日向沢奥の肩)
大村千代治宅付近(?)



東側住居跡(展望台下)
大村代重宅付近(?)



東側住居石垣(展望台下)
大村代重宅付近(?)



東側住居跡(千頭堰堤上)
大村宇佐吉宅付近(?)
石垣と住宅が残存



東側住宅跡(千頭堰堤上)
大村宇佐吉宅付近(?)
住宅と思われる建物



東側住宅跡(千頭堰堤上)
大村友一宅跡地付近(?)
水仙だけがかつての生活を
伝えていた。



湯山集落跡（1）
登山口から最初の跡地



湯山集落跡（1）



湯山集落跡 案内板
登山口から二番目の跡地



案内板周辺の様子



残された水槽



湯山集落跡（2）
登山道から見て水槽の反対側



湯山集落跡 (3)
案内板から30分以上登
った所



湯山集落跡 (3)
石垣の上の宅地跡



神明神社跡地 (?)
尾根筋にあった石垣



湯山林道(カーブ地点)
から望む朝日岳



大間川に架かる
朽ちた吊橋
湯山林道から望む



湯山沢の滝 (?)